

平成二十八年度冬季

全国大学国語国文学会 第一回大会案内・要旨集

期日　十二月三日（土）・四日（日）
会場　大阪樟蔭女子大学（東大阪市菱屋西四一二一六）
近鉄奈良線「河内小阪駅」下車西へ徒歩4分
JRおおさか東線「JR河内永和駅」下車東へ徒歩5分
共催　大阪樟蔭女子大学図書館・田辺聖子文学館

平成二十八年度冬季

全国大学国語国文学会 第一一四回大会^バ案内

○同封の葉書に出欠を^バ記入の上、十一月二十二日（火）までに必ず到着するよう^に^バ返送下さい。（^バJ欠席の場合も必ず^バ返送をお願いいたします）。

○十二月三日（土）の、昼食代（一、〇〇〇円／委員のみ）、懇親会費（一般・六、〇〇〇円、大学院生・五、〇〇〇円）、レジュメ資料代（一、〇〇〇円）、十二月四日（日）の昼食代（一、〇〇〇円）は、同封の郵便振替用紙（口座名称／全国大学国語国文学会第一一四回大会、口座番号／〇〇九五〇—〇—三三三一四九八）にて十一月二十二日（火）までにお振り込み下さい。

○大会についてのお問い合わせは、左記の大会担当までお願いいたします。

〒577-8550 東大阪市菱屋西四一ー一六

大阪樟蔭女子大学学芸学部国文学科奈良崎英穂研究室
Eメール narasaki.hideho@osaka-shoin.ac.jp

○出張依頼状が必要な方は、提出先の宛名と送り先を明記の上、左記の当学会事務局へお申し出ください。

〒102-8386 東京都千代田区三番町六番地一六

二松學舎大學 文學部国文学科 原研究室内

全国大学国語国文学会事務局

Eメール zenkoku.nishogakushah28to30@gmail.com
FAX ○三一七一七一七一六一四

○大阪樟蔭女子大学図書館並びに田辺聖子文学館では、貴重書の展示を行っております。ぜひ^バ来場下さい。

場所 大阪樟蔵女子大学図書館・田辺聖子文学館
期間 12月2日（金）～12月5日（月） 10：00～16：00

第一日 十二月三日（土） 大阪樟蔭女子大学 清志館5階

常任委員会（11時00分～11時30分） 清志館5階G504、G505
委員会（11時30分～12時00分） 清志館5階G504、G505

受付 12時30分～

開会 13時00分～

会場 清志館5階G501教室

開会の辞
会長挨拶
会場校挨拶

講演・シンポジウム（13時15分～17時00分）

テーマ 「女性作家と『源氏物語』」

基調講演（13時15分～14時15分）

与謝野晶子の『新訳源氏物語』から『新新訳源氏物語』へ

——「源氏物語礼讃歌」の成立とともに——

大阪大学名誉教授、阪急文化財団理事・館長

伊井 春樹

公開シンポジウム（14時30分～17時00分）

パネリスト

戦後の与謝野源氏と谷崎源氏——出版文化史の観点から——

慶應義塾大学教授

田坂 勝二

田辺聖子『新源氏物語』から『霧ふかき宇治の恋』へ——『源氏物語』の読みの深化について——

富山大学教授

吳羽 長

翻案作品の変遷——田辺・瀬戸内訳からケータイ小説・ライトノベルへ——

神戸大学准教授

北村 結花

コーディネーター・司会

大阪樟蔭女子大学教授

中 周子

総合司会／本学会常任委員・奈良大学教授 上野
本学会会長・京都市立芸術大学名誉教授 中西
大阪樟蔭女子大学学長 北尾

悟進誠

懇親会（17時30分～20時00分）

会場

大阪樟蔭女子大学食堂（高智館一階）

会費

一般・六、〇〇〇円 大学院生・五、〇〇〇円

第二日 十二月四日（日）

大阪樟蔭女子大学 翔空館10階

受付開始 9時00分～

研究発表会『A会場』

会場 翔空館10階SI001教室

午前の部（9時20分～12時15分）

『古事記』の古層——「稻羽の素兎」説話から――

『うつほ物語』における『孝経』の受容——「仲忠」という人物について――

〈休憩〉

清少納言の惟仲批判——惟仲登場章段に見える作者の意図――

連体形をとる「してある」をめぐつて——終止形と比較して――

発表者／二松學舎大学大学院生
司会／同志社女子大学教授
司会／名桜大学准教授
司会／和洋女子大学

総合司会／本学会常任委員・奈良大学教授

上野 誠

室根 淳子
北川 和秀

蔡芸
星山 健

大村 美紗
吉海 直人
岩下 裕一
迫田(呂)幸栄

研究発表会 『B会場』

会場 翔空館 10階 S1002 教室

午前の部 (9時20分～12時15分)

総合司会／大東文化大学教授

藏出しのぶ

森鷗外と仏教——『大日本続蔵經』を中心に——

発表者／大正大学大学院生
司会／中京大学教授

岩谷 泰之
酒井 敏

作家であり続けるために——石川達三『武漢作戦』から——

発表者／明治大学大学院生
司会／中京大学教授

吳 恵升
酒井 敏

〈休憩〉

山城正忠 「九年母」——群衆に与えられる主体性と「沖縄文学」の形成——

発表者／東海大学大学院生
司会／奈良教育大学教授

小河 淳寛
日高 佳紀

山崎豊子『不毛地帯』が語りかける戦後

発表者／福岡工業大学教授
司会／奈良教育大学教授

徳永 光展
日高 佳紀

昼食・休憩 (12時15分～13時15分)

研究発表会 『A会場』

会場 翔空館10階S1001 教室

午後の部 (13時15分～13時55分)

西鶴の町人物に描かれた成熟都市・堺—『日本永代蔵』を中心に—

発表者／堺市博物館学芸員

司会／関西学院大学教授

矢内
一磨

森田
雅也

パネル発表 (14時10分～16時10分)

テーマ 「谷崎潤一郎とメディア・ミックス」
パネリスト

谷崎源氏〈旧訳〉の参照文献の推定—卷一を中心にして—

國學院大學大学院生 嶋田 龍司

「盲人」の夢—谷崎潤一郎「春琴抄」と〈映画〉をめぐる考察

同志社大学大学院生 佐藤未央子

谷崎とボーデレールの美学—『陰翳禮讚』を中心にして—

同志社大学大学院生 グレゴリー・ケズナジャッド

コーディネーター・司会

大阪樟蔭女子大学准教授 奈良崎英穂

授賞式 『A会場』 (16時10分～16時20分) 研究発表奨励賞

閉会の辞

本大会実行委員長・本学会常任委員 大阪樟蔭女子大学教授 中 周子

平成二十八年度冬季

全国大学国語国文学会第一回大会公開シンポジウム

テーマ 「女性作家と『源氏物語』」

『源氏物語』は千年の時空を超えて日本のみならず世界中で読み継がれている。海外での翻訳は二六〇種類を越え研究も盛んである。東洋の小さな島国で女性作者の手によって生まれた一作品が、これほど長く広く読み継がれているのは、原作の魅力もさることながら、数々の翻訳が大きく寄与しているのである。日本においても、各時代のさまざまな作家たちによって次々と翻訳・翻案が行われて来た。なかでも、日本初の全巻口語訳を成し遂げた与謝野晶子をはじめ女性作家による翻訳の存在は注目すべきであろう。各時代における女性作家による翻訳の方法を探る中に立ち現わてくる『源氏物語』の本質と魅力を考えてみたい。

再創造されることで存続してきた古典文学の有り様を、作家と『源氏物語』との関わりにおいて解明することは、古典文学を未来に伝える可能性を拓くことにも繋がるであろう。

基調講演

与謝野晶子の『新訳源氏物語』から『新新訳源氏物語』へ

—「源氏物語礼讃歌」の成立とともに—

大阪大学名誉教授、阪急文化財団理事・館長 伊井 春樹

公開シンポジウム（14時30分～17時00分）

パネリスト

戦後の与謝野源氏と谷崎源氏

—出版文化史の観点から—

田辺聖子『新源氏物語』から『霧ふかき宇治の恋』へ
—『源氏物語』の読みの深化について—

翻案作品の変遷—田辺・瀬戸内訳からケータイ小説・ライトノベルへ—

コーディネーター・司会

慶應義塾大学教授 田坂 憲二

富山大学教授 吳羽 長

神戸大学准教授 北村 結花

大阪樟蔭女子大学教授 中 周子

平成二十八年度冬季

全国大学国語国文学会 第一回四回大会

研究発表会 発表要旨

【研究発表会／A会場 午前】

『古事記』の古層——「稻羽の素菟」説話から

関東学院大学大学院生 室根 淳子

漢字は音と義で構成されている。しかし従来『古事記』の解釈は字義中心の解釈に偏りがちであった。口誦で伝えられた神話・伝説を内包しているはずの『古事記』に、音による表現といったものはないのだろうか。この発表では、「稻羽の素菟」説話を基に、音による表現を探り、論ずることとする。『古事記』は、主として記紀編纂時の漢字音である中古音（隋唐音）で記されているが、稻荷台1号墳鉄劍銘をはじめとして記紀以前にも漢字表記は存在した。これらは隋唐音以前の古い漢字音（上古音）に基づいて表記されている。同様に『古事記』の中にも、特に字義未詳の箇所などには、古い音が残っている可能性があると言えないとは言い切れない。古音の可能性がありそうな例をあげる。「稻羽の素菟」説話に於て、『古事記』のどの注釈書も「稻羽」は「因幡」のことであるというが、『古事記』では「稻羽」とのみ表記される。そして、白兎ではなく「裸菟」を助けた「袋」を「負」った大穴牟遲神が「大国主神」となる。これらを中国上古音から鑑みると「八十神 (pet-zji.p-djen)」が「八上比壳 (pet-zjiang-pie-mé)」のいる「稻羽 (do-hiuā)」の「裸菟 (jiua-tha)」を「袋を負つた (biu.-da)」大穴牟遲神が助けるという表現になる。菟が裸であるのも因幡 (i.n.phian) ではないのも、表記する字を音によって選択しているからではないかと思われる。

右記の説話の例から、少なくとも『古事記』の裡には韻を揃えたような音による表現が存在する可能性がないとまでは言い切れないと思われる。そして、音にこだわる表現は、選字に影響を与え、その影響は表記・解釈にまで及ぶのではないか。

漢字は音と義で構成されている。しかし従来『古事記』の解釈は字義中心の解釈に偏りがちであった。口誦で伝えられた神話・伝説を内包しているはずの『古事記』に、音による表現、修辞といつたものははないのだろうか。この発表では、「稻羽の素菟」説話を基に、音による表現を探り、論ずることとする。

『古事記』は、主として記紀編纂時の漢字音である中古音（隋唐音）で記されているが、稻荷台1号墳鉄劍銘をはじめとして記紀以前にも漢字表記は存在した。これらは隋唐音以前の古い漢字音に基づいて表記されている。同様に『古事記』の中にも、特に字義未詳の箇所などには、古い音が残っている可能性があると言えるかもしれない。

古音の可能性の数例をあげる。「稻羽の素菟」説話に於て、『古事記』のどの注釈書も「稻羽」は「因幡」のことであるというが、『古事記』では「稻羽」とのみ表記される。そして、白兎ではなく「裸菟」を助けた「袋」を「負」つた大穴牟遲神が「大国主神」となる。これらを中国上古音から鑑みると「八十神 (pet-zji.p-djen)」が「八上比壳 (pet-zjiang-pie-mé)」のいる「稻羽 (do-

hiau)」の「裸菟(jua-tha)」を「袋を負つた(biu.-da)」大穴牟遲神が助け、試練をして「大国主神(dat-ku.k-tjio-djen)」になるという表現になる。菟が裸であるのも因幡(in-phuan)ではないのも、表記する字を音によって選択しているからではないかと思われる。

右記の説話の例から、少なくとも『古事記』の裡には韻を揃えたような音による表現が存在する可能性がないとは言い切れないと思われる。そして、音にこだわる表現は、選字に影響を与え、その影響は表記、解釈にまで及んでいたかも知れない。

『孝經』がいつから日本に伝来したのかは、明確な記録がない。『日本三代実録』に見られる清和天皇の詔書に、『孝經』を大学寮のテキストとして採用することが述べられている」とから、『孝經』が平安時代前期までに、広く読まれたことが確認できる。『孝經』の開宗明義章には、「夫孝始於事親、中於事君、終於立身」とある。まず親に事えることに始まって、次に君主に事えて、最後に立身するということと、「孝」の意味を説明している。そのほか、『孝經』には、「故以孝事君則忠」、「子曰、君子之事親孝。故忠可移於君」という言葉も出ていて、初めて、「孝」と「忠」との関係を論じている。

一方で、『うつほ物語』の主人公の「仲忠」は、「孝の子」として生まれて、「忠」という語をもつて名づけられた。「孝」と「忠」との両面性が見られる。本発表は、「仲忠」という人物と『孝經』の受容関係を考察しながら、物語を長編化した方法について検討したい。

『うつほ物語』における『孝經』の受容

—「仲忠」という人物について—

白百合女子大学大学院生 蔡芸

『うつほ物語』は、俊蔭の一族と正頼の一族のことが中心に描かれている長編物語である。物語の主人公の仲忠は、「藤原の君」の巻に登場していないが、「俊蔭」の巻に、「孝の子」として生まれた。「俊蔭」の巻には、仲忠が母に孝養を尽くして、北山の

「うつほ」に移住して、母に秘琴の伝授を受けたことが描かれている。物語の最後の「樓の上」の巻では、右大将になつた仲忠が、俊蔭の一族を再興した。「俊蔭」の巻と照應をはかりながら、秘琴伝授の物語を語り終えている。仲忠の孝養譚と『孝子伝』との受容関係は定説化しているが、仲忠という人物と『孝經』の関係も気になる。

清少納言の惟仲批判—惟仲登場章段に見える作者の意図—

二松学舎大学大学院生 大村 美紗

本発表では、「大進生昌が家に」章段および「一月、宮の司に」章段に登場する平惟仲を取り上げ、作者=清少納言の惟仲批判に迫る。惟仲の登場は、いずれの章段においても脇役程度にすぎないものの、先行研究において、不遇の定子を支えた「親」中関白家であったのか、中関白家に「反」する人物であつたかについて、

諸氏により様々に論じられている。しかし、これらの論においても、専ら史料により判明する史実背景からその人物像が論じられ、史実と『枕草子』テクストにおける惟仲描写とを結びつけた検討はなされていない。

そこで、『枕草子』における惟仲の扱われ方を、史実に見える惟仲と、テクストに記される語との差から再考察し、いわゆる分析的な構造をもつ1単語相当の単位である。「してある」が使われる文の構造（タイプ）と、もとになる動詞の種類によって、「してある」は大きく2つのタイプに分けられることができる。「視覚的にとらえられる具体的なもの、ある状態での存在」をあらわす「してある」の終止形の使用では、「机にコップがおいてある。」のような文構造をもつ文がもつとも多い。そして、連体形の場合は、「机においてある十コップ」を除くと、「コップをおいてある十機」のような機能的なカテゴリにおける「してある」の違いについて論じる。

『枕草子』の「日記的章段」と呼ばれる章段は、宮廷での生活やそこでの見聞を記した章段である。しかし作品に描かれる内容と史実には差異が認められることは既に先行研究が指摘する通りである。本発表では、惟仲登場章段に、文化的視点から惟仲批判することで、定子を高めようとする作者の意企があることを明示し、「日記的章段」が史実に沿った記録ではなく、作者の意図によって選択し記されたものであることを示す一例としたい。

例（1）「机にコップがおいてある。」（いいおわり文） ↓
構造A 「机においてあるコップ」（連体動詞句）
構造B 「コップがおいてある机」（連体動詞句）

例（1）のいいおわり文に対応する、連体動詞句と名詞とのくみあわせの構造において、「コップ」（存在の主体）を規定するのか、「机」（ありか）を規定するのかによって、A「Nにしてある+N」（どこどこに～してある+なになに）とB「N（が・を・）してある+N」の2つの構造がなりたつ。構造Bには、さら以下のような下位構造がある。

「コップがおいてある机」→「Nがしてある+N」 構造Bが
「コップをおいてある机」→「Nをしてある+N」 構造Bを

名桜大学准教授 迫田（呉）幸栄

連体形をとる「してある」をめぐつて——終止形と比較して——

「コップの おいてある 机」→「Nのしてある+N」構造Bの連体動詞句の内部構造にみられるこの違いに注目してみると、「Nをしてある+N」構造Bをと、「Nのしてある+N」構造Bの使用例が多く、共に「Nがしてある+N」構造Bがの2倍以上の使用例があつた。このことから、終止形よりも連体形の「してある」の使用に「他動性・はたらきかけ性」が残つていると考えられる。

なお、連体形のかたちをとる「してある」の前にくる名詞の格表示の全体的な分布をみると、構造Aの「～に」が一番多く、次に「～を」（構造Bを）、「～の」（構造Bの）、「～が」（構造Bが）の順であらわれる。

【研究発表会／B会場 午前】

森鷗外と仏教——『大日本統藏經』を中心に——

大正大学大学院生 岩谷 泰之

鷗外の蔵書は東京大学総合図書館に「鷗外文庫」として納められ、現在でも閲覧が可能である。そこには明治に刊行された大蔵経『日本校定大蔵経』や『大日本統藏經』、日本撰述の仏教書を集めた『大日本仏教全書』等の叢書の他にも、仏教に関する書物が数多く見られる。そこからは鷗外の仏教に対する関心の高さがうかがえる。また、鷗外作品における仏教の影響は、日蓮を描いた戯曲「日蓮上人辻説法」や『唯識三十頌』を引用した戯曲「生

田川』等にも現れている。鷗外と仏教との関わりについては詳細な研究が行われてきたが、まだ限定的な範囲に限られている。先行研究のほとんどは、鷗外が明治三二年から約四年間を過ごした九州小倉に関するものである。鷗外は小倉で曹洞宗の僧・玉水俊媿と出会い、唯識論を学んだ。主にこれらのこととに焦点が当てられ研究が行われてきた。

だが『日本校定大蔵経』『大日本統藏經』『大日本仏教全書』等は小倉時代以降に刊行されたものである。しかも鷗外は『大日本統藏經』の評議員を刊行元の蔵經書院から依頼され、それを受諾している。本発表ではこの評議員の問題に焦点を当て、小倉時代以降の鷗外と仏教の関わりにおける一端を明らかにしたい。

これまで鷗外が評議員を引き受けたと記した書簡が全集に收められていると指摘されることはあつたが、実際に鷗外がどのように戸籍書院と関わったのかは研究されてこなかつた。その理由は、鷗外が戸籍書院に関して記したもののが、その書簡以外に残っていないからだと考えられる。そのため、戸籍書院が発行していた機関紙『大蔵経報』に記された鷗外に関する記述を中心調査した。その結果、鷗外が『日本校定大蔵経』を全国でもいち早く予約していたことや、『大日本統藏經』における他の評議員について明らかになつた。またそのことをもとに、鷗外が書き残した寺院に関する記録が、評議員と関係しているものではないかという考察も加えたい。

作家であり続けるために——石川達三『武漢作戦』から——

明治大学大学院生 呉 恵升

「生き抜く」ことへの強い意志も感じられる。戦時下において石川達三の歩んだ軌跡は、まさに日本の作家や詩人たちの多くが強いられた道に他ならなかつたのではなかろうか。

リアリズム作家として第一回芥川賞を受賞した『蒼氓』（一九三五年）で出発した石川達三は、現地取材をしてそのリアリズムの方法をいかんなく發揮し『生きてゐる兵隊』（一九三八年）を発表した。が、掲載誌の「中央公論」が発禁処分を受けるという筆禍事件を起こす。そのような事件があつて『武漢作戦』（一九三九年）を第一歩として、戦争へ「全面協力」していく。

従来の石川達三研究は『生きてゐる兵隊』論に偏りがちで、

『武漢作戦』については日本では「名誉回復」を図つた作品で、『生きてゐる兵隊』からの「後退」という評価がある一方、中国では「内容としては眞実と考えられる内容が微塵もなく、犯した罪の埋め合わせにすぎない」と「転向文学」という評価が行われてきた。

本発表では『武漢作戦』を中心に、日中両国におけるこの作品及び戦時下の石川達三に対する評価を比較しながら、「筆禍事件」が当事者の生活にはどんな波紋を投げたのかに触れて、戦時下における作家の言動がどのようなものであったか、考察したい。

『生きてゐる兵隊』から『武漢作戦』までの石川達三の「変化」をどう捉えるべきか。それは「後退」か、それとも「転向」か。「名誉回復」のほかに、「作家であり続けたい」「作家で生きていいたい」という石川達三の気持ちも読み取れるのではないか。つまり、リアリズム作家である石川達三が作家として生きていくために、家族を守るために、『生きてゐる兵隊』までの立場を貫かなかつたのである。ここからも石川達三の「生きること」

山城正忠 「九年母」

——群衆に与えられる主体性と「沖縄文学」の形成——

東海大学大学院生 小河 淳寛

山城正忠「九年母」（明治四四『ホトトギス』六月号）は、「沖縄文学」と呼ばれる領域の文学史で、一定の基準を満たした初の作品だというのが定説である。

一定の基準の通過は、一般的な文学作品として水準に達し、「沖縄文学」の条件とされる「沖縄」という全体的な問題を扱う」という条件を満たした、という二点を以ての判断による。作品の歴史的な位置から、沖縄文学史上では重視されてきた「九年母」だが、本文に踏み入った研究はほとんどされていない。先行研究も三者による論考があるだけに留まる。

本発表の目標は、少なくとも「九年母」研究を従来より深め、本作の「沖縄文学」性の検証を、本文に踏み入った考察より行うことにある。本作がいかに「沖縄」という全体的な問題を扱い、作品の表象が「沖縄文学」という領域と視点の構築につながるかを明らかにしたい。

そのために本作の内容で注目するのは、群衆である。本作は語り手が特定の登場人物に寄り添わない客観的な語りの形式で構成

される。本作の焦点は、舞台となる日清戦争期の沖縄で動く無名の群衆と、「松田家」の人々、その一室を間借りする「校長」、親清派の代表的な人物、「奥島老人」らの名を持つ人物との間を移動する。そして物語の最後は、「奥島老人」が群衆に、朝敵として排斥される風景で幕を閉じる。ここからは、特定の人物ではなく、無名の群衆に主権や物語、歴史状況の主動力があることを読むことができるだろう。ここには名のある人物が無名の人物よりも重要という、物語の前提的な価値観を転覆させる効果も見ることができる。

群衆は「特有の琉球色をおびた（略）多くの顔」と描写される。沖縄の群衆は日清戦争を機に清と日本の間で翻弄されながら日本化への一途をたどることになる。しかし、彼ら群衆には「沖縄人」「琉球民族」という特有性があり、本作にはそのような主体性を客観的な語りによって促している構造を認めることができる。この群衆という全体性に主体を持たせる部分が「沖縄文学」の成立につながったと考えることができる。

そこで、フィクションとして描かれた作品内での出来事に歴史的事実がどれほど重ね合わせられているかという点について、主人公・壹岐正のモデルとなつた瀬島龍三の著作に学ぶ作業を繰り返す方法を採用しながら、山崎が戦後処理の残した悪癖を執拗に追求しようとした事實を検証しようとする。同時に、この作品が「サンデー毎日」（一九七三年六月～一九七八年八月）に五年間にわたって連載されていた最中に、第四次中東戦争と第一次オイルショック（一九七三年）、ロッキード事件（一九七六年）、ダグラス・グラハム事件（一九七八年）が相次いで起り、『不毛地帯』が世相を予言した作品として同時代における読者の間で注目を集めていた事実に考察を進める。

結論として、日本の高度経済成長期における脆弱なエネルギー政策の問題やアメリカ頼りの自衛隊戦闘機受注が收賄を引き起さざるを得ない点に、戦後の日本が無意識下に沈め込もうとしてきた解決を見ぬ戦後処理問題の存在を指摘し、上辺だけの経済復興に沸いていた日本が見落とし、放置した暗部を山崎が抉り出そうとしたとの理解に到達したい。

山崎豊子『不毛地帯』が語りかける戦後

福岡工業大学教授　徳永　光展

戦後の歴史認識が風化しつつある現在、日本の戦後史を壮大なスケールで描いた山崎豊子『不毛地帯』を読み解きながら検証する作業には、忘れられた歴史を炙り出す意義が認められる。今日のグローバル化が進行した社会を基準に振り返ってみると、戦争

【研究発表会／A会場 午後】

西鶴の町人物に描かれた成熟都市・堺

—『日本永代蔵』を中心にして—

堺市博物館学芸員 矢内 一磨

井原西鶴の浮世草子のなかでも『日本永代蔵』を中心とした町人物は、一七世紀中頃の大坂をはじめとする諸都市の町人社会を活写しており、評価が高い。谷脇理史氏は『日本永代蔵』を本邦の経済小説の原点と評したが、本発表では経済にとどまらない都市社会生活全般を知る史料として、西鶴の『日本永代蔵』をはじめとする町人物を考える視点を提起したい。

本発表では、『日本永代蔵』を中心に町人物に描かれた堺に関する記事について考察する。堺は大坂に近接する都市であるが、西鶴が「三里違うて大坂は格別」や「堺は始末で立つ、大坂はばつとして世を送り、所々の人の風俗をかし。」と記すように、全く違った気質をもつた都市であった。西鶴の慧眼は急速な経済成長遂げる大坂に対して、万事堅実な経済活動が営まれ、それに裏付けられて政治と治安が安定した「成熟都市」と評すべき堺の都市社会生活の特徴を見事に摘出する。西鶴が描いた堺のプロフィールを、裏付ける歴史資料に言及しながら発表する。

堺は、海に面した津であり、中世以来、東西のあらゆる文物が入り交じつて、茶の湯や医学など新たな文化を創出する一種の実験場的側面を持っていた。しかしながら、その一方で、近世都市堺においては、西鶴が描き出したような堅実な氣風が醸成されたことも忘れてはならない。堺の近世都市社会は、始末と僨約を旨とする成熟社会を主旋律とし、中世以来の貿易によって栄え

た都市の繁栄を副旋律とし、相反するかのようにみえる二つの流れを抱え込んで、歴史的展開を遂げていった。しかし、この二つの流れを抱え込むことができたことこそ、堺の懐深い地勢の特徴であり、近世近代に豊かな文化を醸成した素地であつたことを考察したい。

パネル発表

テーマ 「谷崎潤一郎とメディア・ミックス」

第一回大会公開シンポジウムのテーマは「女性作家と『源氏物語』」であるが、関西に縁の作家で『源氏物語』を現代語訳した人物といえば、与謝野晶子と並んで谷崎潤一郎の名があげられるだろう。このパネル発表では、「谷崎潤一郎とメディア・ミックス」というテーマのもと、谷崎研究の多彩さ国際性を反映して、若手研究者三人に多様な側面から切り込んでいただく。

嶋田龍司氏は谷崎源氏三種類の訳のうち最も古い旧訳について素材論的考察を、佐藤未央子氏は『春琴抄』の映画化を通して盲人のつむぐ夢と現実の位相に関する考察を、グレゴリー・ケズナジャヤツド氏は、『陰翳禮讚』を中心として谷崎におけるボーデールの影響を論じる。谷崎と古典、谷崎と映画、さらには谷崎と外国文学との関わりを通して、谷崎文学の多様な世界を読み解く契機としたい。

パネリスト

谷崎源氏 〈旧訳〉の参考文献の推定——卷一を中心にして——

國學院大学大学院生 嶋田 龍司

入り交じつて、茶の湯や医学など新たな文化を創出する一種の実

験場的側面を持っていた。しかしながら、その一方で、近世都市

堺においては、西鶴が描き出したような堅実な氣風が醸成されて

いたことも忘れてはならない。堺の近世都市社会は、始末と僨約

を旨とする成熟社会を主旋律とし、中世以来の貿易によって栄え

「盲人」の夢——谷崎潤一郎『春琴抄』と
〈映画〉をめぐる考察 同志社大学大学院生 佐藤未央子
谷崎とボーデールの美学——『陰翳禮讚』を中心に
同志社大学大学院生 グレゴリー・ケズナジャヤツド
コーディネーター・司会大阪樟蔭女子大学准教授 奈良崎英穂

校舎配置図



アクセスMAP

「JR河内永和駅」下車
東へ徒歩5分(400m)

「河内小阪駅」下車
西へ徒歩4分(300m)



Access Map

